

私

の勤務する近畿大学工学部建築学科（東広島市）の今年度の学部生就職内定率は六月現在ですでに九割を超えている。またその就職先のほとんどは建設業界であり、私もこのことに内心ホッとしつつも、その就職内定の早さには驚いている。私は二〇一二年に近畿大学工学部に着任したのだが、この七年間で学生の就職状況は大きく好転した。近畿大学は近年、入試制度の改革や近大マグロに代表される大学イメージの刷新によって大きな成果をあげ、受験者数全国第一位となり、偏差値も大幅に上昇した。これに伴って地方にある近畿大学工学部建築学科の偏差値も上昇し、優秀な学生が数多く入学してキャンパスの雰囲気も大変良くなった。女子学生の比率も高まっている。この上更に世の中の景気の回復傾向に伴って、学生の就職率は格段に良くなったと言える。現在はまさに売り手市場である。就職先も七年前には考えられなかった大手企業に数多くの学生が就職を決めてくる。しかも早い時期に。このことは、大学としても大変喜ばしいことであるが、その反面で、内定後の学習意欲の低下や大学院進学率の低下に教員は頭を悩ませている。しかし私は、後の人生に本場に役立つものを大学三年生までに経験してもらいたいと考えている。

私の暮らす東広島市は、広島県のほぼ中央に位置し、酒造りで有名な西条を中心として、南は瀬戸内海に面し、北は田園風景と山並みを有

各 人 各 説

講義室ではできない 田舎の建築教育

近畿大学 工学部建築学科 准教授

谷川大輔

Daisuke Tanikawa



する南北に長く都市と自然が共存するまちである。特に瀬戸内の風景は美しく、地方で暮らす「豊かさ」を実感させてくれる。私は、東広島に移住して三年目に市の北部、中山間地域に位置する自然豊かな福富町に、築百年以上経過し空き家となった農家型古民家を購入し、学生と共に改修を始めた。学生と共に古民家を改修することで、田舎や地方がもつ「豊かさ」を共に経験できると考えたからだ。この古民家は、谷間の緩やかな傾斜の田んぼの真ん中に建っている。建物は茅葺屋根の母屋と赤瓦ののる蔵と納屋があり、その姿は一带の田園風景を象徴するものである。この古民家に土間、囲炉裏、かまど、五右衛門風呂などを再生し、田舎暮らしが体験できる地域の移住定住促進の拠点施設として整備を進めている。

これまでこの古民家再生のプロジェクトには、私の研究室だけでなく多くの大学三年生までの学生が参加してくれている。参加学生は古民家改修やイベントの企画運営を通して、田舎の自然環境にふれ、地域住民の方々と交流しながら地方のもつ「豊かさ」を感じてくれているはずである。このようなことはやはり、講義室では教えることはできないし、地方にある大学ならではの建築教育だと考えている。参加学生の多くは、都会の大企業に就職するのだが、ここでの経験は、必ずや彼らのこれからの仕事や人生に良い影響を与えることができると信じている。